

鵠 沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 4 0 号

1 9 8 8 年 1 月 1 2 日

鵠 沼 道 祖 神 ま っ り 特集号

鵠 沼 を 語 る 会

鵠沼地区道祖神まつり

主催 鵠沼を語る会

協力 「宮の前」高橋新太郎さん及び、鵠沼小、鵠洋小、鵠南小児童の皆さん

道祖神とは、村とか町の人々にとって、気さくな守り神である。村境、辻などの道路端に鎮座し、そこには土に汚れた農民が素朴な表情で、合掌し厄除けを祈る真しな姿が連想されるのである。

道祖神のいわれを探つていくと、古事記にでてくるアメノウズメとサルダヒコに突き当たらざるをえない。アメノウズメは天照大神が天の石屋にこもつたとき、かなりみだらな恰好で踊つたことで有名である。皇孫ニニギノミコトが豊葦原中国に降臨されたとき、サルダヒコが天の八衢（やちまた）で、目をぎらぎらさせて立ちはだかつたので、天孫の一行のアメノウズメが話しあいに行き、先導役をつとめに來たことが判つた。このときアメノウズメは例によつて乳房をあらわにし、かなり扇情的な恰好をしていたという。サルダヒコと結婚することになるが、サルダヒコはその後伊勢の海で、比良夫貝に手をはさまれて海に引ずり込まれて溺死する。このことは大きな貝に狭まれるのたとえで、女にすぐ心をゆるす癖があることを意味している。

道祖神はこの猿田彦をまつたものというが、そのご利益とは道案内の神となつたり、交通の安全、国土の守護や五穀豊穡、商売繁盛（とくに水商売）、厄除祈願夫婦和合、安産、長寿祈願等々に信仰が厚い。道祖神はほかに塞の神（さえのかみ）、衢の神（ちまたのかみ）とも称され、とても性格の複雑な神である。夫婦和合への信仰があるから、これでよく見受ける男女双体像の説明がつくと思う。また塞の神は別名幸神（さいのかみ）とも書き、古事記では道反大神（みちかえしのおおかみ）、塞坐黄泉戸神（さやりますよみどのおおかみ）ともいい古典における岐神（くなどのかみ）と一致する。村境、峠、辻などにあり、悪霊を防ぐとともに生者と死者、人間界と幽冥界を司る神ともいう。そもそも古事記において、イザナギがなくなつたイザナミを恋しく思い、黄泉の国へイザナミに会いに行つたが、追いかけて逃げて帰るとき、追つ手を防ぐために大きな木や石で遮ぎつたと書いてある。この木や石を「塞の神」又は「塞坐黄泉戸神」というのである。そして道祖神とは道路とか、旅行者の守護神ともなつたのである。

道祖神で最も有名なところは信州の安曇野といわれるが、全国での道祖神の分布

は関東から中部地方に限られているそうで、山間部ほどその密度が濃くなる。主な姿態は衣冠束帯をつけた「祝言像」、手を握りあつた「握手像」から「抱擁像」、「接吻像」に至るまで種々さまざまで、いずれも信愛と情愛に満ちてほほえましい像である。この信仰が盛んになつたのは、江戸時代の元禄のころからと言われておりさらには平安～鎌倉時代にも縁結びの神として信仰されたともいう。なお、甲斐路には丸い石を集めて祀り、丸石道祖神として信仰されている。

さて、鵠沼の道祖神であるが、双体神の男女像のものは、鑑賞用にされたものか4体ほどが亡失してしまい、神明4丁目の昭和58年に作られたものを含め3体しか残っていない。神明から海岸へかけて、上村、宮の前、清水、刈田、宿庭、中東、中原、石上、原、八部、納屋、藤が谷、海岸町内会と各まちごとに道祖神は存在するが、文字を彫つた道祖神塔が多い。鵠沼一帯は砂地で石質のものが見当らないせいか、双体神の素材は鎌倉石とおぼしきものでおおむね質素である。さて、そのお祭りの行事であるが、呼び名をどうそしん、どうろくじん、せいと、さいと、どんどやき、おたきあげ、さいとばらい、などと称し毎年1月14日に行う。小屋を建て、幟を立てたり、神酒、菓子、五色の紙などをお供物とする。子ども達の楽しみはだんご焼きで、前日に作つておいた三色だんごを三叉枝に串刺して、これを書初め、松飾り、正月飾などを燃した火であぶり、焼いてたべることである。お祭りには、厄除けや魔除け、災難除けを祈願することはいふまでもない。

追記 庚申信仰

干支（えと）の庚申にあたる日（庚申は60日ごとに回ってくる）の禁忌行事を中心とする信仰。起源は中国の道教にあるとされる。人間の体内には三匹の尸（し）または彭（ほう）とよぶ虫が住んでおり、庚申の夜、人が眠っている間にぬけ出して天帝のもとに昇り、その人の罪や過失を告げて命を取らせるから、その夜は眠らずに身をつつしんで過ごさなければならない。そのための禁忌を道教では守庚申といつたが、日本に伝わってから変化し、徹夜と慎みの行事は残つたにもかかわらず三尸虫の伝承は消滅してしまつた。ただ、行事に伴う会食、談笑のほうに重点が移つてしまつたのである。道教の守庚申は日本では庚申待ちとなり、「庚申さま」という信仰対象を祭つて礼拝する形のものとなつた。庚申さまの本体もさまざまで、青面金剛菩薩とするのが一般であるが、阿弥陀仏、観世音菩薩、大日如来、地蔵菩薩、不動明王、帝釈天、猿田彦、道祖神などの神仏から、「申」にみたてて猿にまで及ぶ。庚申信仰のさかんなところは柴又帝釈天、関西では京都の八坂庚申堂、栗田の庚申堂等がある。

道祖神あれこれ

1 相州足柄の悪魔払い

1月13日、子どもたちは思い思いに面をかぶり、手に笹や御幣を持つて、各戸を訪れる。彼らが入りこむと、家人は喜んで子ども組のお祓いを受ける。悪霊を祓うのである。上郡福沢村では、子どもたちは座敷の神棚の下で踊りながら歌い始める。

えー、悪魔っばれー、悪魔っばれー、めでたいことに福がある。オイベッさんという人は、一に俵をひんまいて、二でにっこり笑って、三で酒をひん飲んで、四っ世の中良い良い（ように）と、五っいつもの無いように（いずみのわくように）、六っ無常（びょう）のさ（そ）くさいに、七っ何事無いように、八っ屋敷を開いて、九っ小蔵をおつ立てて、十でとうとう納まった。

こう唱え終ると、お祓い料を受領して次の家に回るのである。

このお祓い料やさい銭が、子ども組の余録として遊楽の資金となつた。それだけに浄財の放出を惜しむ家があると、たちまち夜半に「塞の神さんの引越し」が実行されることになる。朝方になつて戸口が開かないのに気付いて、「しょうのないガキだ」と舌打ちし、それでも重い道祖神を運んで、もとの場所に戻すのであつた。

2 信州松本の三九郎の歌

関東、中部における道祖神祭では、その立役者として三九郎という好色者を設定し、これを散々に罵倒したり、猥歌をわめきちらすのである。

三九郎、三九郎、
かかさのべっちゃんちょうな
周り周りに毛が生えて
中あちょっとちょぼくんで
ホンガラホイ、ホンガラホイ

こうした卑猥なざれ歌であつて、粹人三九郎が最も喜び、男女仲睦まじい道祖神もこれに感応して、その年の豊作をことほいでくれるのだと言う。この性的道祖神の機能分化は

まことに広い。まず地上すべての生命誕生の神として発足している機能は、ある地方では生命発生の不思議感を至上神恵として、道祖神を農神と習合させているし、男女の結縁・夫婦和合・性愛指導・出産・子孫繁栄・育児・生活上の除災招福・精力増強等これらの機能からセックスを削除すると、道祖神全神徳のほとんどの本質は喪失されてしまうので、形而下に一見奔放にまで造像したのである。

3 上州安中の火祭

同祖神小屋とは、太い心棒を立てて、そこへ竹棒を何本もたてかけ、人が入れるように周りを門松やワラをゆわえて作る。子どもたちは、正月十四日の夜徹夜して火をたき、味噌おでんなど食べて泊りり込む。そして十五日あたりに小屋に火をつけて焼くのである。子どもたちが寝泊りして火の不始末があれば、火祭り前に焼けおちてしまう。そして子どもの生命を奪うこともあつたという。そのためドンド焼きをきつのご法度にしてるところもある。

4 甲府盆地の丸石道祖神

笛吹川に沿った道を歩くと、主体神の大きな丸石が祀られていて、その周りに奉納された小さな円石が同居していたり、または同じような円球がいくつも同居していたりする。これがこの地方独特の丸石道祖神なのである。なぜ丸い石が神なのであろうか。御魂代と考えるのが最も妥当である。神霊がのりうつる形象物として、玉は昔から崇拝され、神聖視されてきた。魂（たま）は玉であり、球でまあつた。円石の持つまるい靈力は、ただ行路神としての道祖神信仰だけでなくすべての人に円満成就をことほぐ手向け神として、ひろく用いられるようになったのであろう。

5 駿州御殿場の火中に投げられた道祖神

この地方には目一つ小僧という伝説がある。一目小僧のことで、厄病神のことである。十二月八日と二月八日に山から降りてきて、村人に不幸をもたらし、村人の悪事をつぶさに調べて天帝に報告するという。しかも履物に判を押していき、この履物をはいた者は病

気にかかるといわれ、その日は履物いっさいはかず、外出さえ慎しんだ。目一つ小僧は、村人の不幸を探りあてる快感から、村々を飛び歩き、のぞき見してその結果を帳面に書きつけていく。この報告によつて村人が天から与えられる罰の軽重も決定されるというのだから、絶対に消滅させてしまいたいものであつた。そこで道祖神の所へお願いにでかける。厄病神は帳面を道祖神に預けて、二月八日まで遊びまわるのである。道祖神は村人の懇願をきいて一計を案じ、一月十四日の夕方、自分の小屋に放火して帳面ごと焼いてしまった。それから焰えさかる火中に自分も飛び込み、大火傷を負つてうんうんうなりながら寝ていた。それを知つた厄病神は、慌てて帳面の行方を求めてとんできて、道祖神の火傷に胆をつぶして問うた。すると道祖神は、「いやあ、人間というやつは大変なことをするものだ。お前さんから預つた帳面のことで恨みのかつて、この通り火をつけられて、すんでのことで、殺されるところじゃつた。」と言つて、苦痛に顔をゆがませてみせた。目一つ小僧はゾツとして、下手をすると自分も焼き殺される、と逃げだしていつた。という伝承がある。道祖神を火中に放りなげる風習は、火による浄化であり、ドンド焼き自体が、正月祭祀に用いた神具を焼き浄めるという思想に発して、その火を大切にし無病息災を祈つたのである。目一つ小僧の目一つとは、村人の生活を探りに、板戸の節穴からギョロリと目を光らせる厄病神のことである。

6 豆州伊豆の単体神

伊豆の道祖神は、ほとんどのものが単体の座像である。地藏信仰と道祖神との融和点が一人ぼっちの石像になつたと考えられなくもない。伊豆には道祖神が比較的にあたらしい。その理由は（a）発生時点が新しい。（b）石材が柔かく磨損しやすい。（c）火中にくべたため損耗し、作りかえた。なぜ単体かという追及よりも、信仰上で他郷との異同を見ることの方が、重要だと思われる。前述したように、この地の道祖神は、地藏と類似した信仰を伝えている。まず、子どもの神様だから、どんなに乱暴な扱いをしても罰を被ることもなく、子どもの言うことをきくものと信じている。そこで病気の平癒を望む者は、子どもに頼んで石神に祈つてもらふ。子どもたちは青竹を持つていつて「ナーム、セーノ神サン、〇〇さんの病気がなおりますように」大声で繰り返し、竹で目茶目茶に叩きつける。これが祈願なのだそう。また、大漁祈願を頼まれると、同様に叩きながら、「ナームーノ神サン、魚がとれますように。おがみます。頼みます」と唱え続けることになる。

以上で、関東甲信静というか、群馬、長野、山梨、静岡の各県にわたる道祖神について特徴のあるその形態とか、伝説・信仰などを記したのであるが、補足として次に二、三つにくわえておく。

7 その他

ア 上野の国立博物館にある飛鳥出土の二神抱擁像は、帰化人の手になつた道祖神と考えられており、性神を路傍にさらして悪魔よけにした信仰が、外来のものであつたことを端的に物語っている。

イ 相模の海近い漁村の道祖神を尋ねたとき、ここの石神は荒縄でがんじがらめにゆわかれていた。村に病人ができると、道祖神をゆわいて棒でたたいて治してもらうんだそうである。また、秦野盆地では、農夫の間で「道祖神は、若いころよくやつた、夜ばいの神さまだ。」といわれている。また、静岡県富士山南麓の村では、「村人にふりかかる厄いを、道祖神さまが身がわりになつて汚れてござるので、お祭りの際、焼ききよめてあげるんじゃ。」といわれている。

ウ 江戸文化のうち街に住んでいる都市生活者には、セックスのはけ口を、花街という公許の場に求め、そこを社交と娯楽の中心にすることができた。これに反して周辺の農村僻地では、何らの娯楽施設すら与えられず、ことに性の欲望のはけ口はどこにも与えられなかつた。隠せば好奇の瞳を輝やかせ、抑えればどこかに爆発するのが性の本質である。封建時代の階級制度により、自由を束縛されがちな社会にあつては、朴とつな農山村の民にとり、性的慾望は夜ばいと称せられる婚前肉体交渉が行われるなどの風潮を生み、性の鬱憤をいかに晴らすかといった問題を生じていた。その結果、道祖神の祭りとか、性格のなかにセックスを凝縮させていつたのである。従がつて、江戸時代に急速に波及していつた関東周辺の道祖神は、人間生来の欲求であるセックスの発散を抑えねばならなかつた農山村を背景にして、江戸文化に対抗した土俗の、やむにやまれぬ境遇のなかで成立したのである。

〔注〕以上各編は、伊藤堅吉氏及び遠藤秀男氏の共著である「道祖神のふるさと」（大和書房発行）による。

鶴沼地区の「道祖神塔」現存調査表（年代順）

- (1) 八部（鶴沼海岸 6－7－1 地先）路傍（S62 年 11 月12日移転）

寛延辛未天 願主（右脇）（1751）

南無道祖神 守護 安山岩製 尖頭平柱型

正月吉日 浅場太郎左エ門（左脇） 総高 73 榧

- (2) 上村稲荷詞境内（鶴沼神明 4－3－1 地先）（1807）

昭和 58 年癸亥年再建（3 代目）（右脇）「寛政元年己酉天1807」

双体神像 火成岩製蓮弁光背型 総高 59 榧

上村町内（左脇）「11 月吉日上村氏中」

- (3) 宮の前（鶴沼神明 2－22 地先）皇大神宮前通り

天保 11 年 9 月吉日（右側）「天保 11 年再建」（1840）

道陸神 安山岩製 尖頭角柱型 総高 65 榧

元禄己 正月吉日（左側）

- (4) 宮の前（鶴沼神明 2－5－19）

道祖神 安山岩製 平頭角柱型 総高 64 榧

嘉永 5 年子 正月（左側）（1852）

- (5) 砥上公園内（鶴沼石上 1－11）

文久 3 年（右脇）（1863）

道祖神 石上村（基礎前面）

癸正月吉日（左脇）火成岩製 尖頭角柱型 総高 54 榧

- (6) 宿庭（鶴沼神明 2－1 地先）砂岩製 蓮弁光背型 総高 61 榧

双体神像（半肉彫）（造立年銘欠）（江戸時代）

- (7) 荻田（本鶴沼 5－11－18）砂岩製蓮弁光背型 総高 45 榧

双体神像 (半肉彫) (造立年銘欠) (江戸時代)

(8) 中原町 (本鵜沼 2 - 10 - 18)

明治 36 年 1 月 吉日 (右側) (1903)

道祖神 火成岩製 尖頭角柱型 総高 53 榎

中原氏子中 (左側)

(9) 中東町 (本鵜沼 2 - 7 地先)

明治 42 年 1 月 14 日 (右側) (1909)

道祖神 火成岩製 尖頭角柱型 総高 55 榎

中東町 (左側)

(10) 賀来神社境内 (鵜沼藤ヶ谷 3 - 10 - 19)

道祖神 鵜沼海濱 (基礎前面) (上部少欠)

(明治時代) 火成岩 円頭型 総高 83 榎

(11) 稲荷社境内 (鵜沼石上 3 - 1 - 23)

大正 6 年 (右脇) (1917)

道祖神 宮沢みつ (背面)

10 月 1 日 (左脇) 火成岩 自然形 総高 65 榎

(12) 鵜沼海岸 1 丁目辻路傍 根府川石 自然形 基礎上高 134 榎

道祖神

昭和 8 年 癸酉 8 年 鵜沼海岸町内 (背面) (1933)

(13) 原町 (本鵜沼 4 - 6 - 19)

昭和 34 年 正月 吉日 (右脇) (1959)

道祖神 火成岩製 尖頭角柱型 総高 46 榎

原氏子 (左脇)

(14)清水（本鵠沼5－7－15）

昭和42年 清水氏子中（右側）（1967）

道祖神 火成岩製 尖頭角柱型 総高42櫃

(15)納屋（鵠沼海岸7－16－17）

道祖神 火成岩製 尖頭角平型 総高47櫃

昭和46年1月14日鵠沼納屋一同（左脇）（1971）

所在不明道祖塔

(16)大東辻の路傍（本鵠沼2－4－32）昭和48年以後行方不明

延宝6年（右脇）（1678）

双体神像 安山岩製 蓮弁光背型 総高52櫃

□□□供養（左脇）

(17)納屋の辻路傍（鵠沼海岸7－16－17）

奉納安永2己11月吉日（右脇）（1773）

道祖神 双体神像 安山岩製 蓮弁光背型 総高48櫃

新田村 醒井氏（左脇）

(18)鵠沼新田（鵠沼橋2－14－9地先）

施主当村甚五門（右脇）（1779）

双体神像 安山岩製 蓮弁光背型 総高40櫃

安永8年己未天9月 日（左脇）

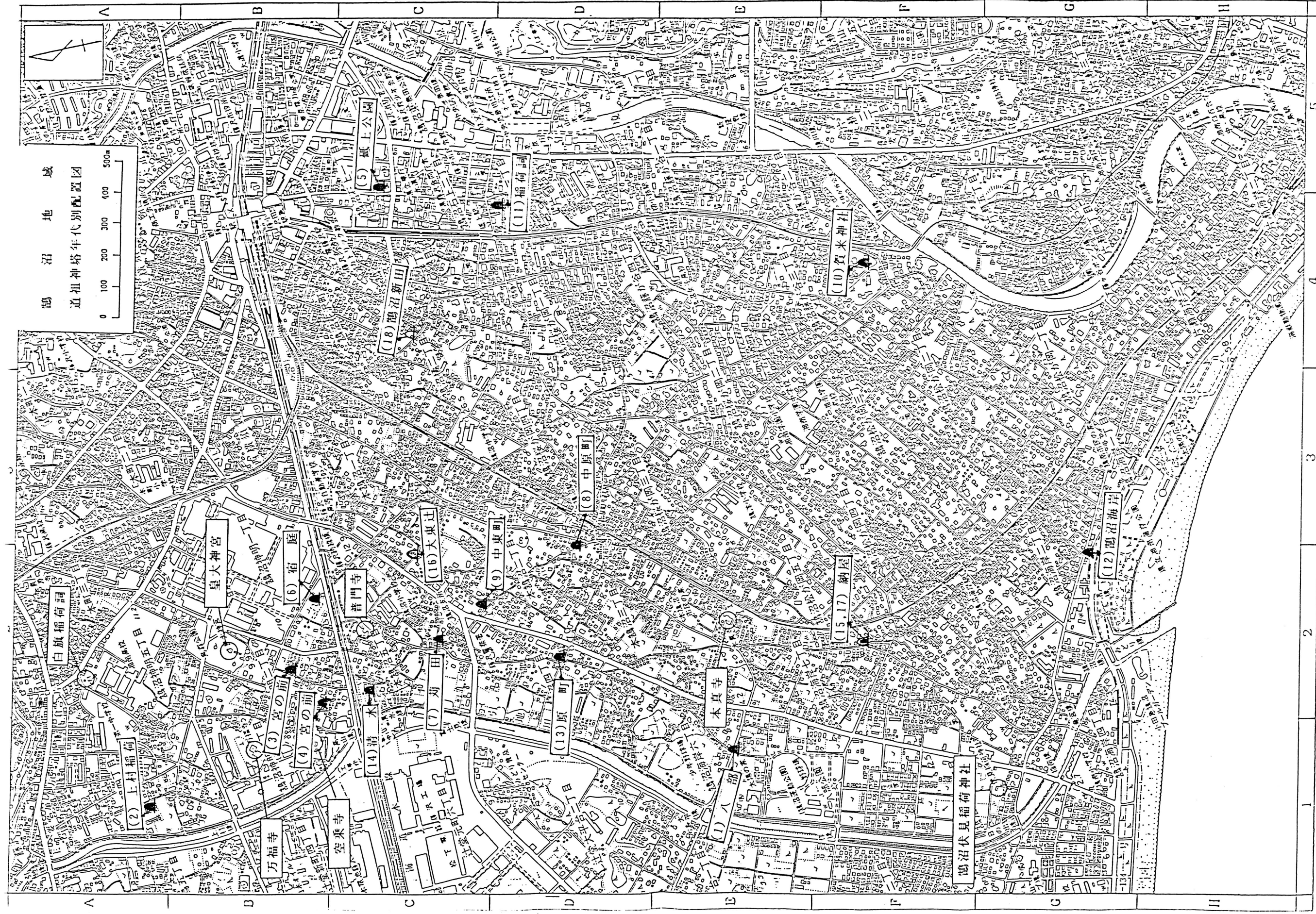
(道 祖 神) ^{みち あへ}道 饗 祭 祝詞に云

^{おおやちまた ゆ つ いわむら}大八衢に湯津磐村の如く、 ^{さや ま すめかみたち おおまえ まを}塞り坐す皇神等の大前に申さく、
^{やちまたひこ のみこと やちまた ひ め のみこと く な と み な}八衢比古（命）， 八衢比売（命）， 久那斗と御名は申して、

^{たたえごと を まつ}称辞 ^{ね くに そこ}竟へ奉らくは、根の国，底の国より ^{あら うと こ もの}鹿び疎び来む物に

^{あいまじこ あいくちあ たま}相率り相口会へ給ふこと無くて、 ^{した ゆ した}下より行かば下を守り
^{うえ ゆ うえ}上より行かば上を守り、夜を守り、 ^{まつ いは}日を守りに奉り、斉ひ

^{まつ}奉れと……………

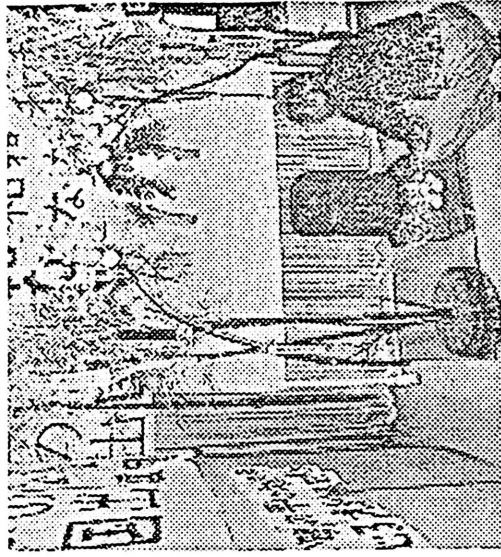




道祖神のお飾り再現

鷹沢市の鵜沼地区公民館まつり、長後地区ふるさとまつりが三十一日、それぞれの公民館で開かれた。催しは作品展示、模擬店、公民館活動の紹介、歌や演芸と盛りだくさん。

鵜沼では、郷土史を勉強している「鵜沼を語る会」が、県立博物館所蔵の「双体道祖塔」を安置、地区に古くから伝承されている、道祖神のお飾りを再現している「雪真」。竹やろうで作った、系船杭、どんと煙きに使った三色の団子を供え、周りに地元小学生に協力してもらった一



足早い雪き初めも展示されている。

道祖神は、旅の安全、悪霊の侵入を防ぐため路傍に鎮座する素朴な神。地区に残るさまざまな道祖神の写真十五点、拓本十点を紹介している。祭りはいずれも一日まで。(藤沢)

「道祖神」の研究発表も

鵜沼公民館まつり

鷹沢・鵜沼公民館を利用しているサークルが、一年間の活動成果を発表する「第十一回公民館まつり」が三十一日、同公民館を主会場に始まった。鵜沼地区の数々の道祖神を扱ったユニークな展示もあり、周辺の住民たちでにぎわった。

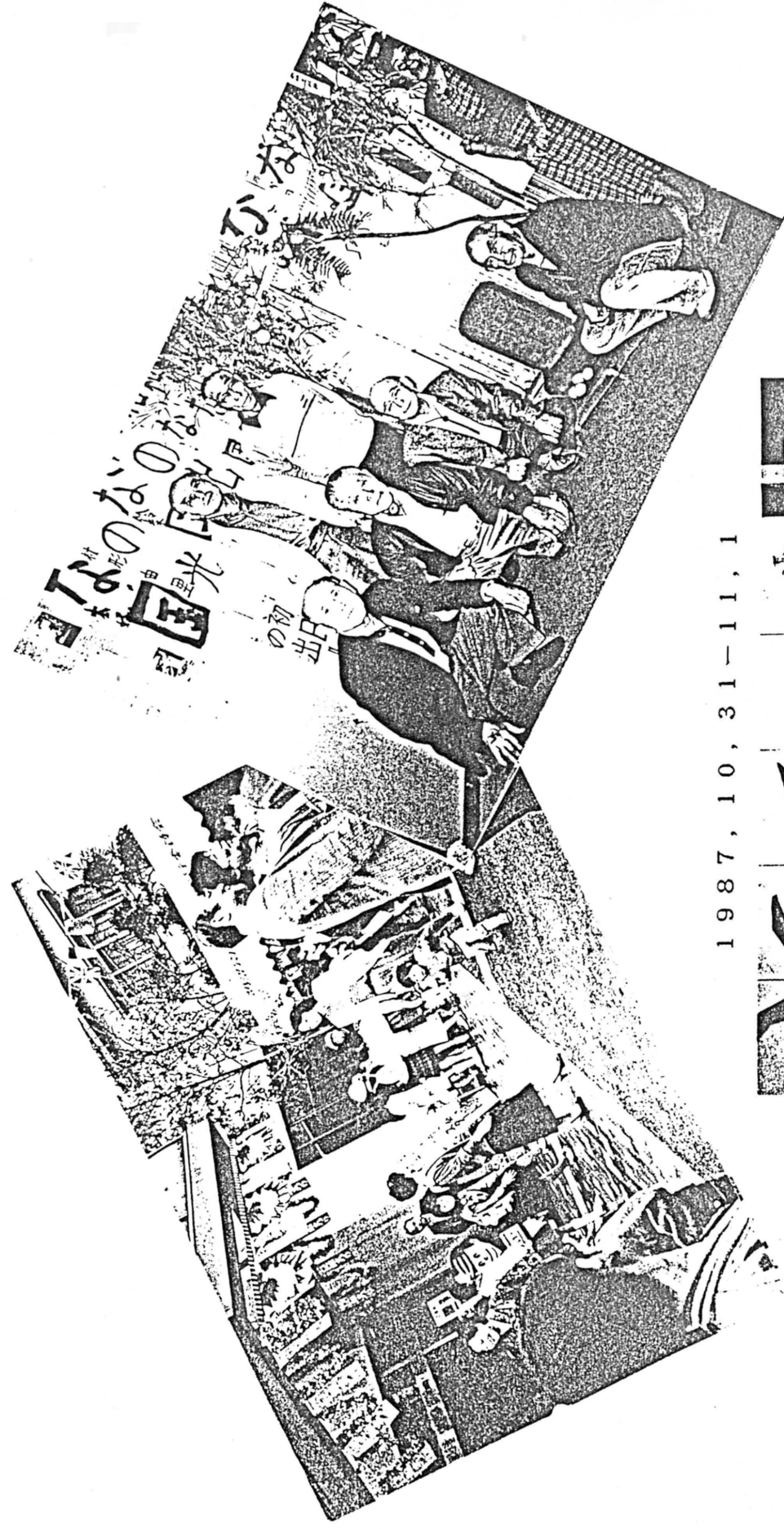
道祖神についての研究を発表したのは、郷土史家のグループ「鵜沼を語る会」(鷹沢務代表、三十六人)。いつの間にか失われたものも含め鵜沼地区の二十二の道祖神を、拓本、

写真などで紹介。延宝六年(一六七八年)に建てられたと伝えられる本鵜沼の道祖神は、七、八年前になくなってしまったが、近所の人が生きていた色紙を見つけ出し展示に加えた。

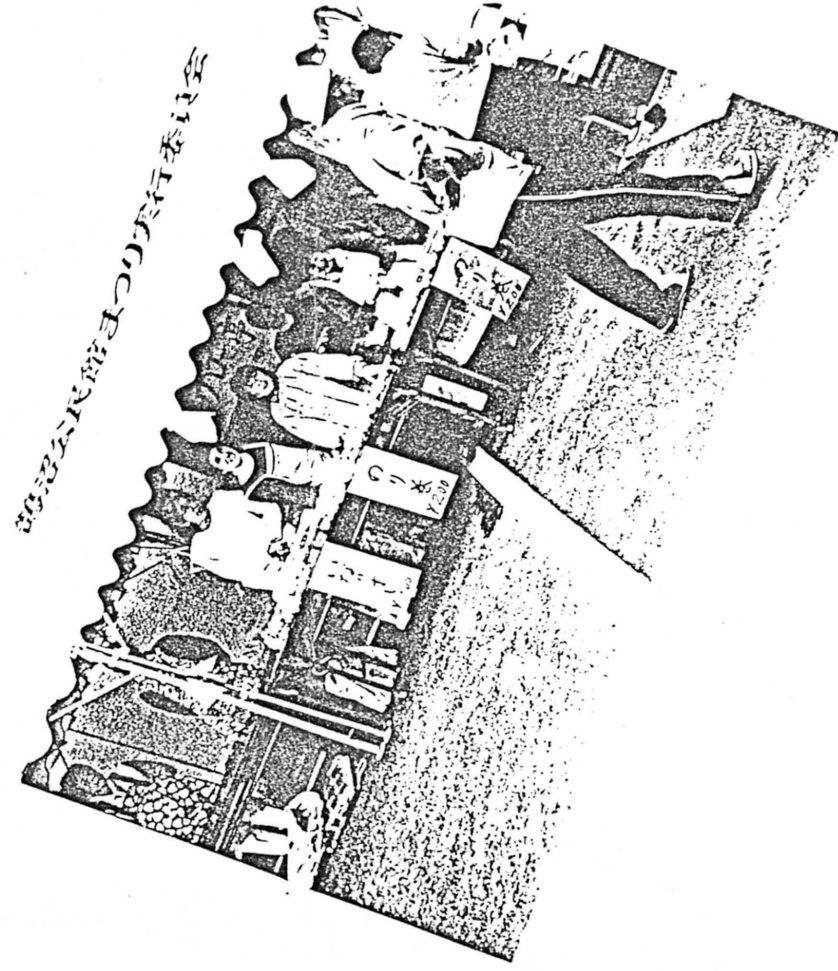
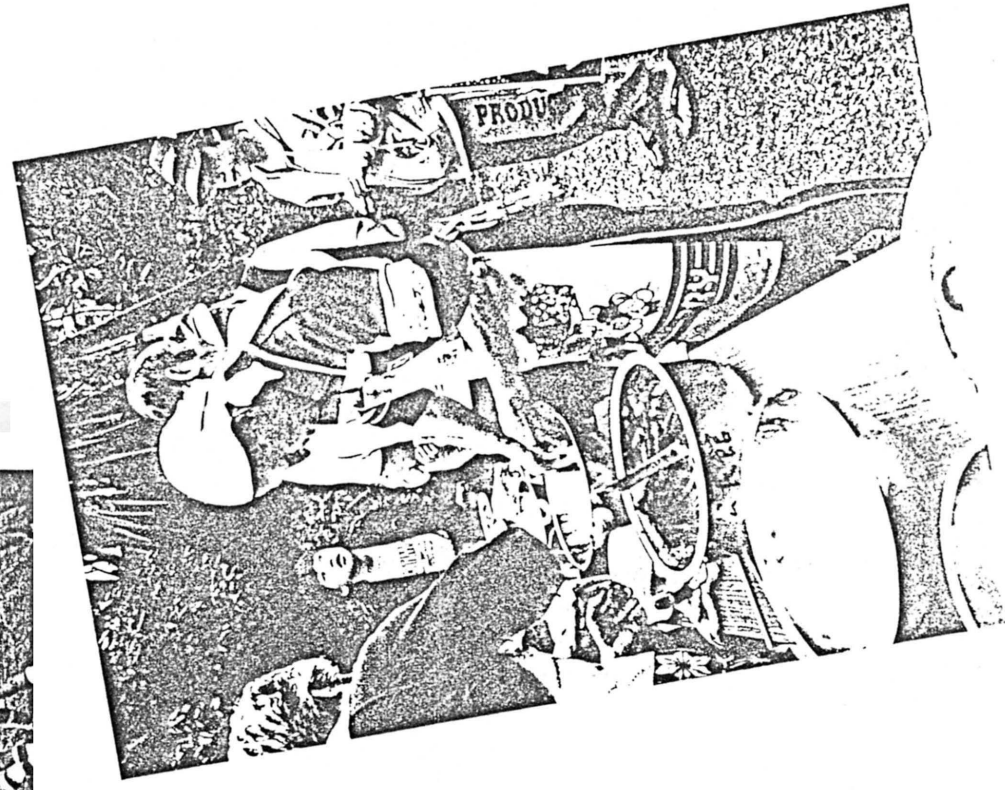
また、昔の道祖神のまつり方を、わらなどを使って再現したり、道祖神についての説明資料を用意して、道祖神と人々の生活との結びつきを分かりやすく発表、子供たちの関心を集めていた。

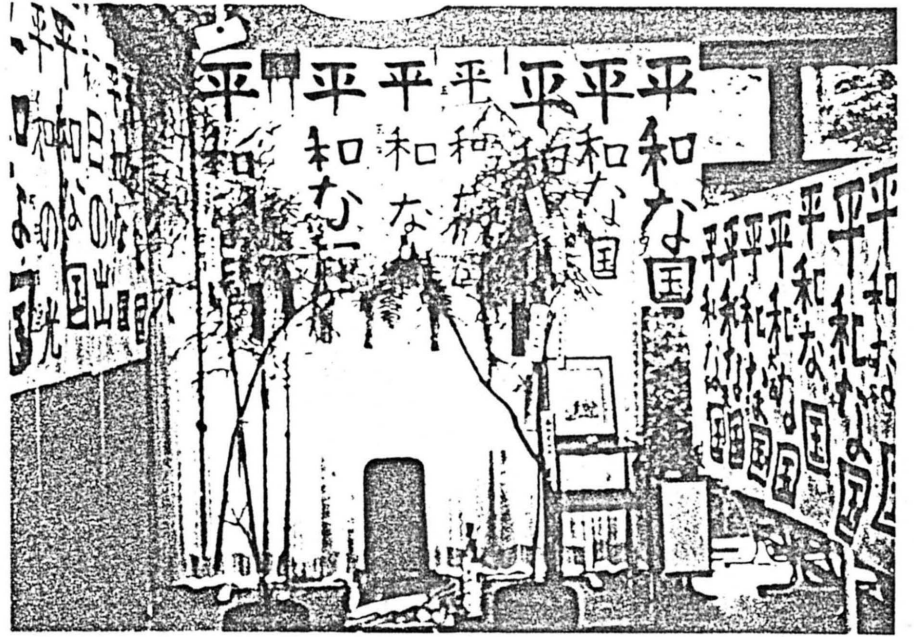
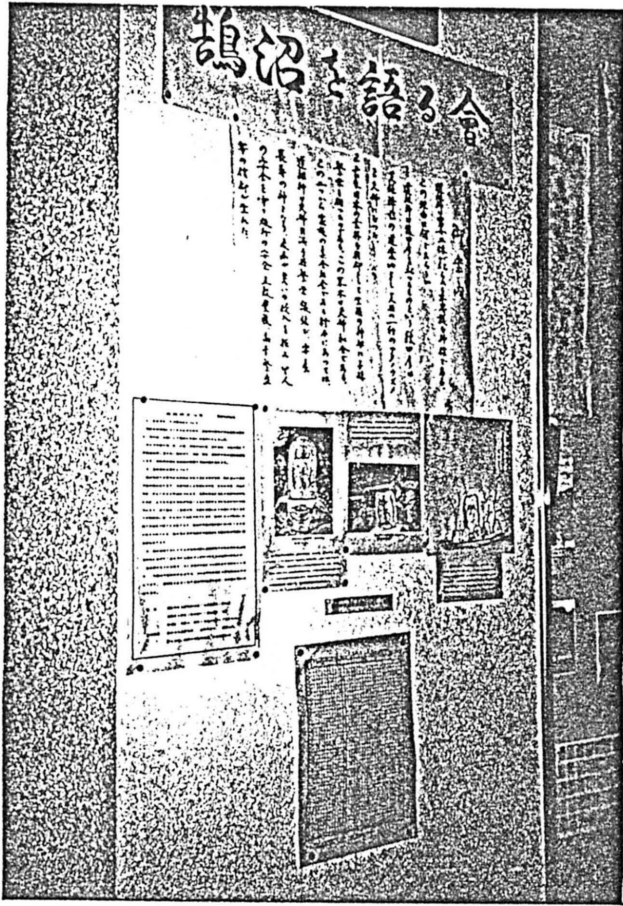


道祖神についての研究発表も展示された鵜沼公民館まつり



1987, 10, 31-11, 1



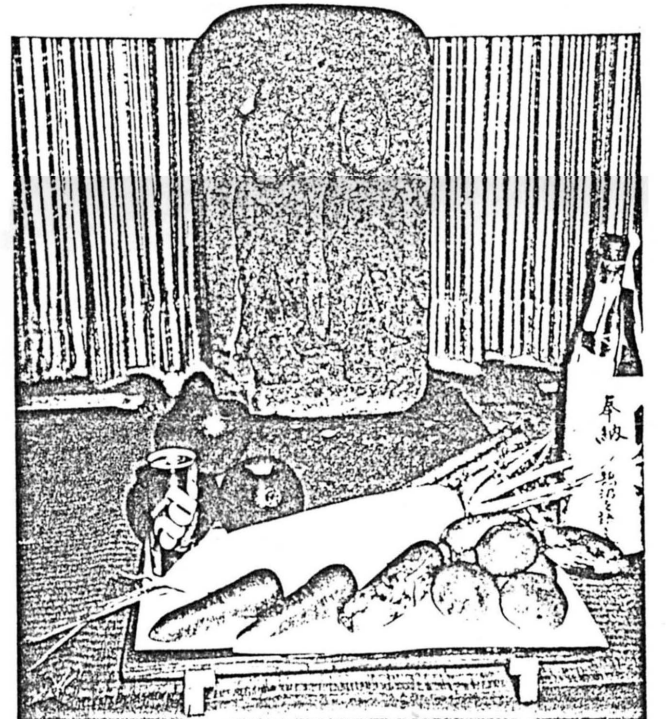


△ 鳩沼小、鳩洋小、鳩南小児童のみなさん書き初めと五色の色紙に「奉納道祖神」女の子なら「道祖神」と書いたのを笹竹の先へつけ、辻の道祖神の前へ集って大騒ぎをします。(内藤千代子文学よりT3)

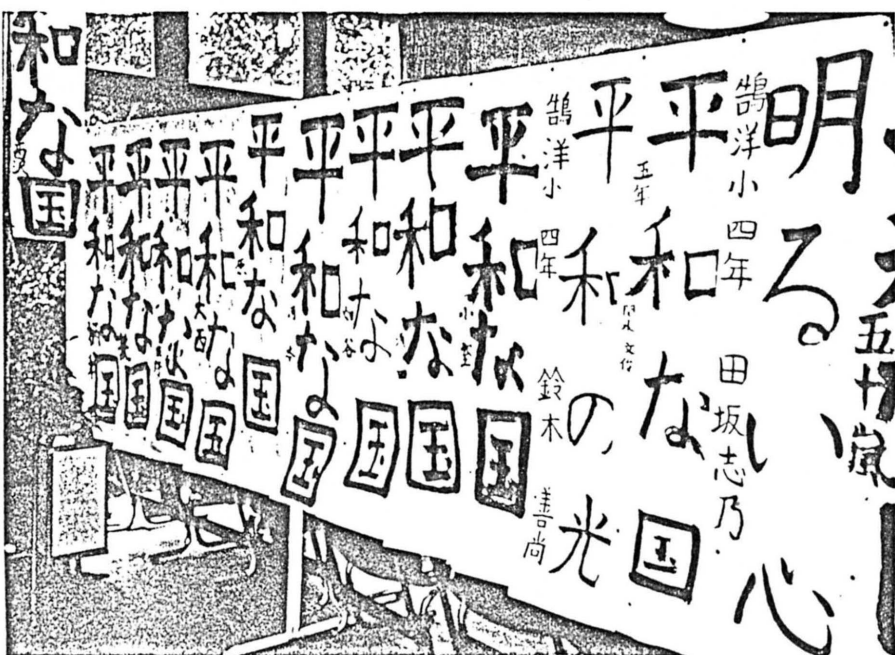
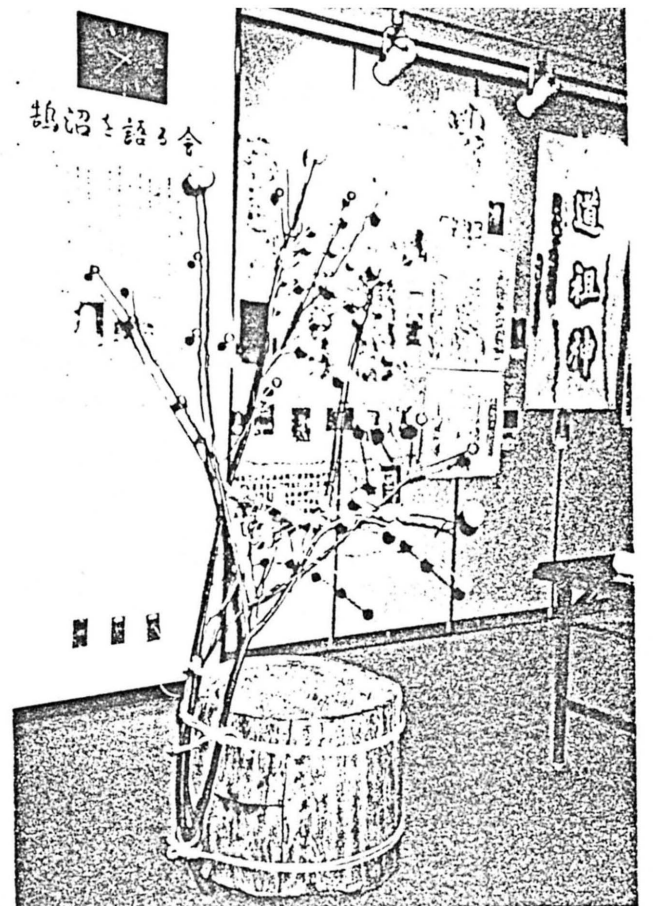


△ 道祖神の昔をしのんだ飾りつけ

▷ 会場に展示した「双体神像塔」
(県立博物館所蔵)



▷ 昔は座敷に餅搗き臼に柳の木に赤白緑色の菰玉とだんごを作りみかんを飾りつけた

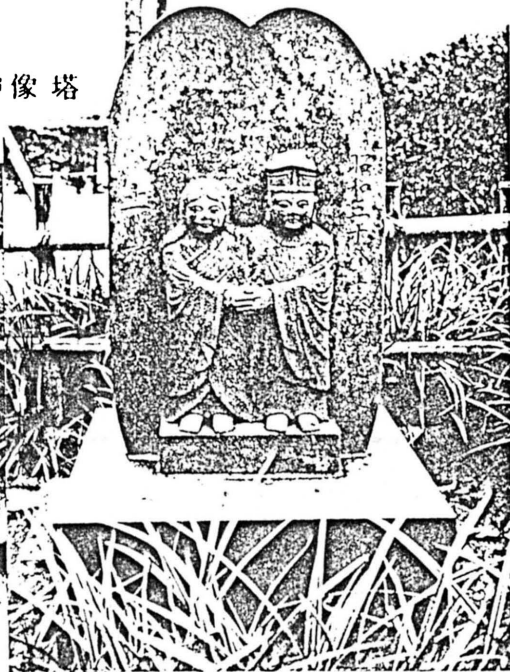




◁
(1)
八部、南無道祖神塔



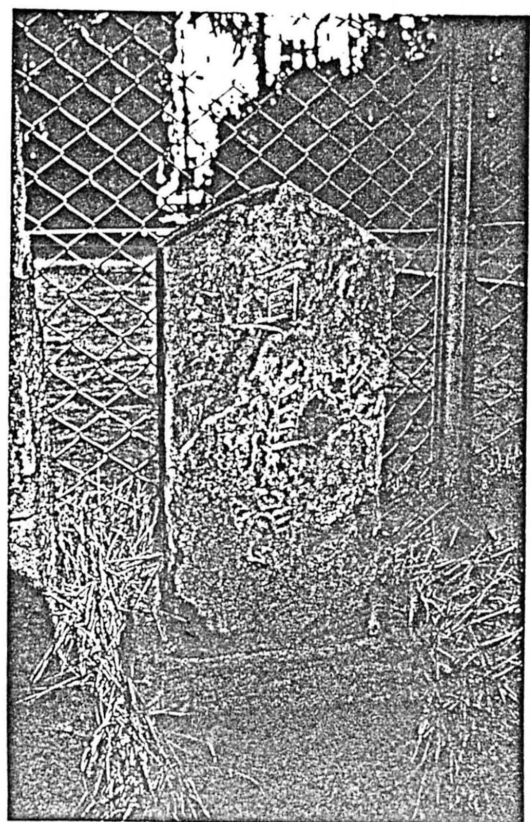
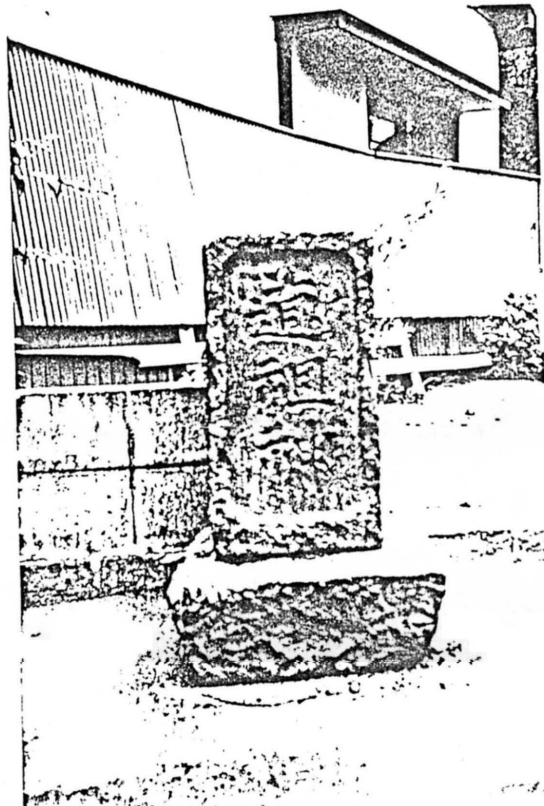
▽ (2) 上村稲荷双体神像塔



▷
(3)
宮の前、道陸神塔



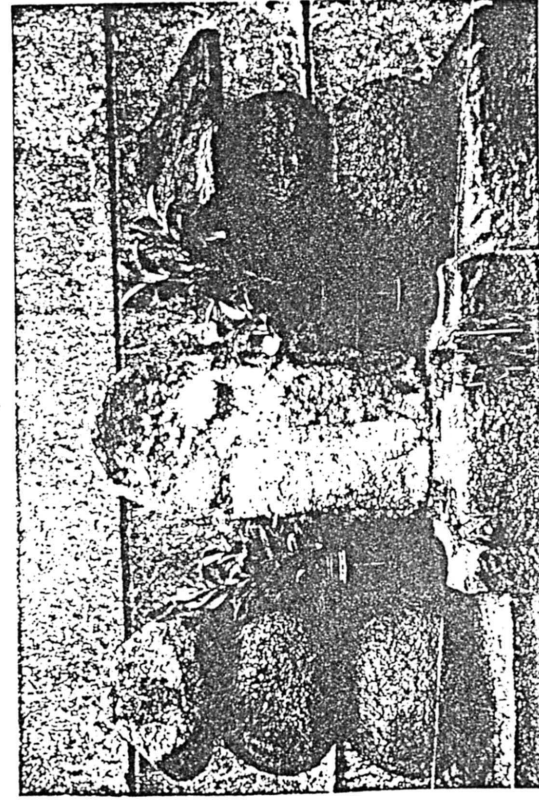
◁
(4)
宮の前、道祖神塔



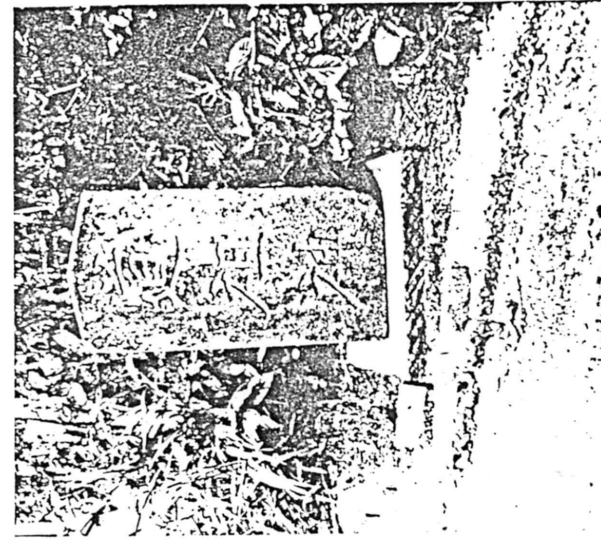
◁
(5)
砥上、道祖神塔



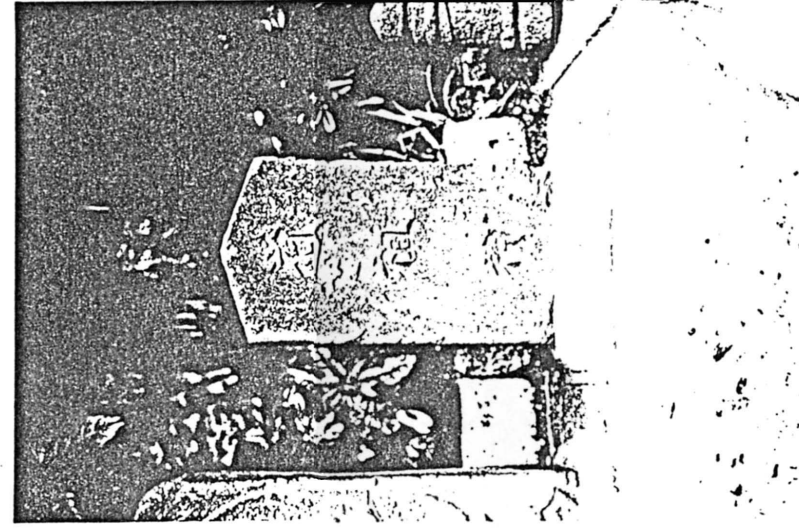
▷
(6)
宿庭、双体神像塔



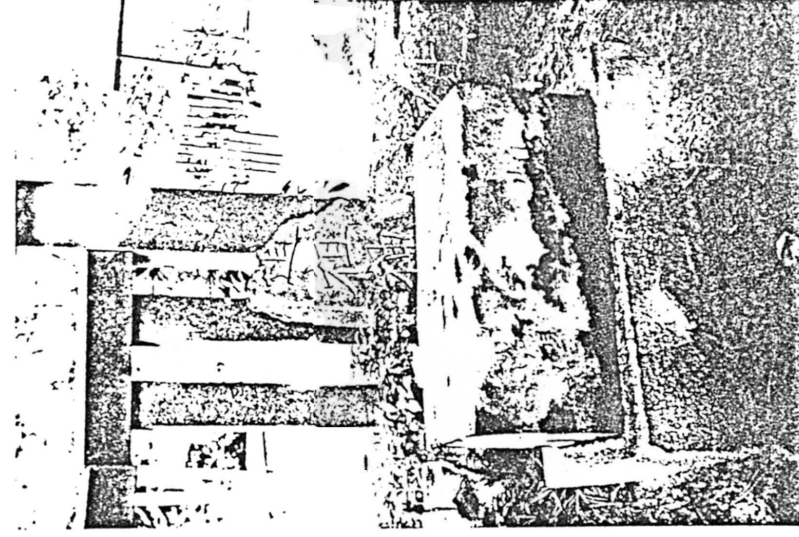
△ (7) 刈田, 双体神像塔



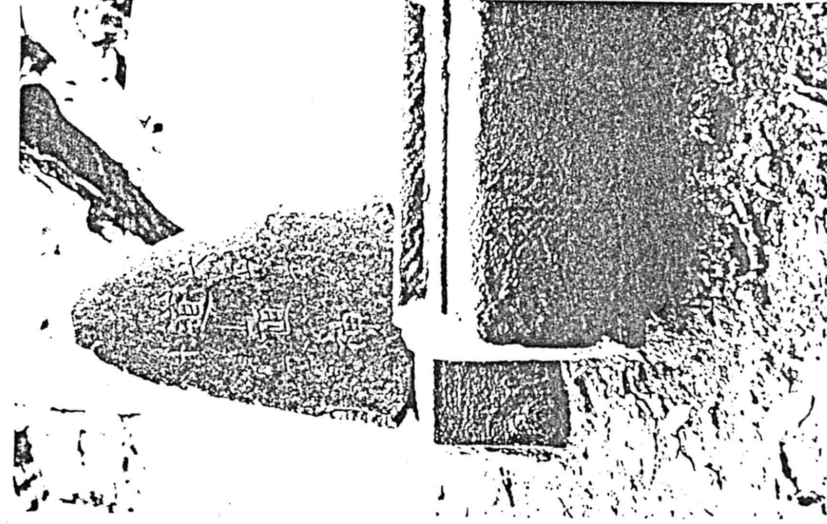
△ (8) 中原町, 道祖神塔



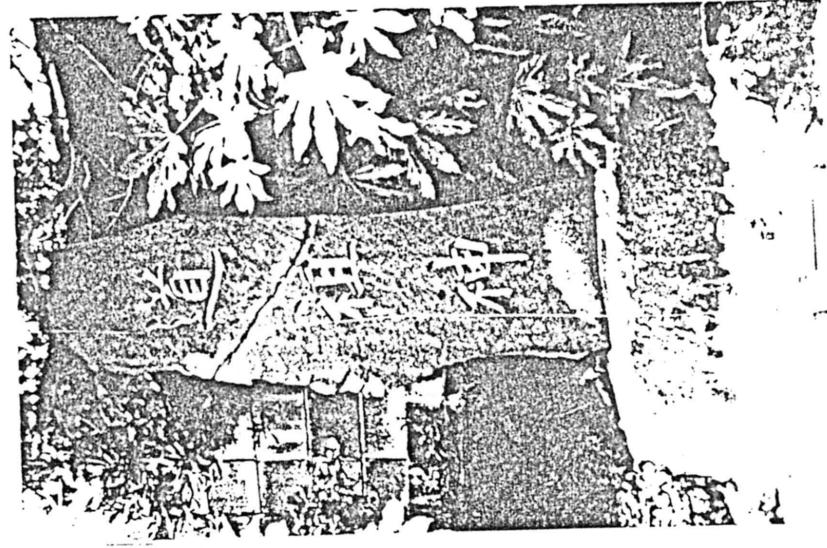
△ (9) 中東町, 道祖神塔



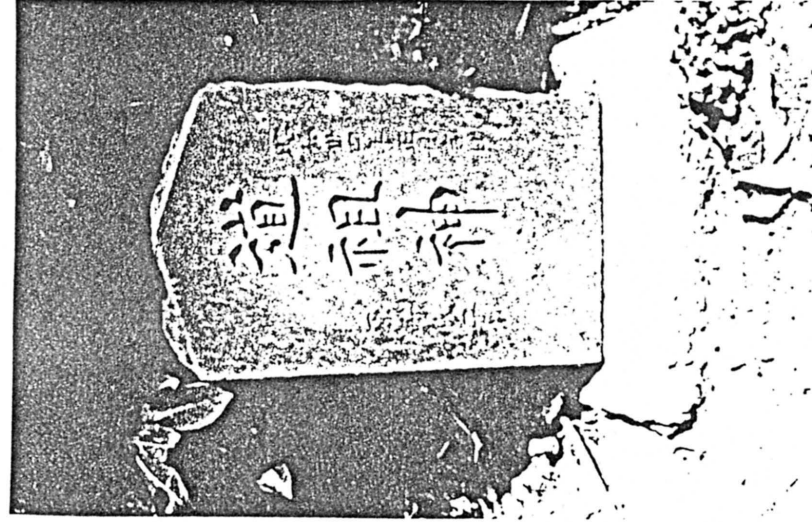
△ (10) 賀来神社, 道祖神塔



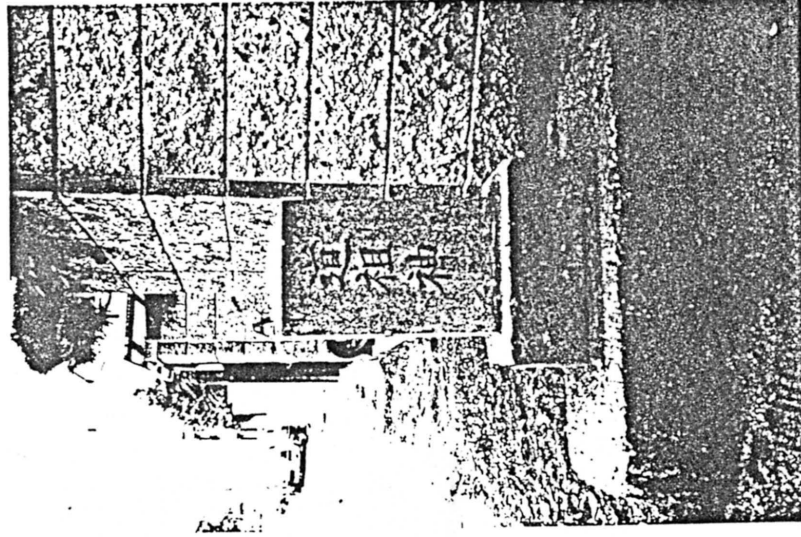
△ (11) 稲荷社, 道祖神塔



△ (12) 鶴沼海岸, 道祖神塔



▽ (13) 原町、道祖神塔



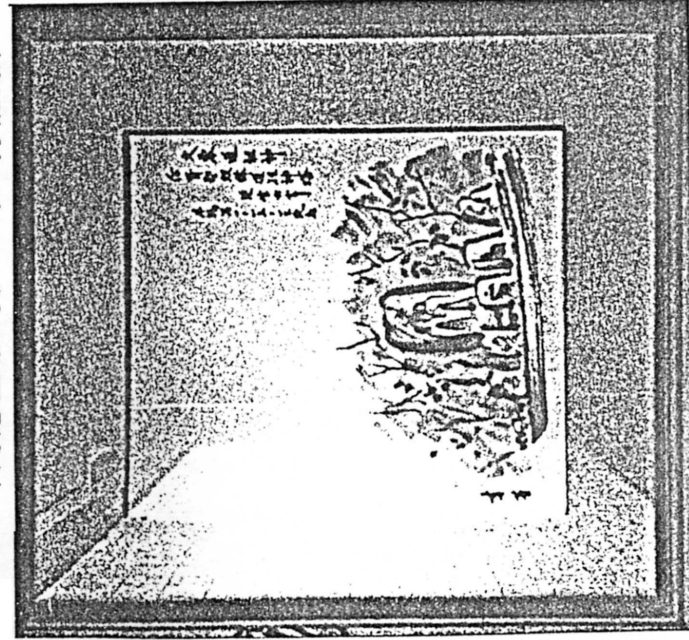
▽ (14) 清水、道祖神塔



▽ (15) 納屋道祖神塔

▽ 森井知利氏所蔵（本鵠沼）

（円応正泰氏絵S48,1月記録）



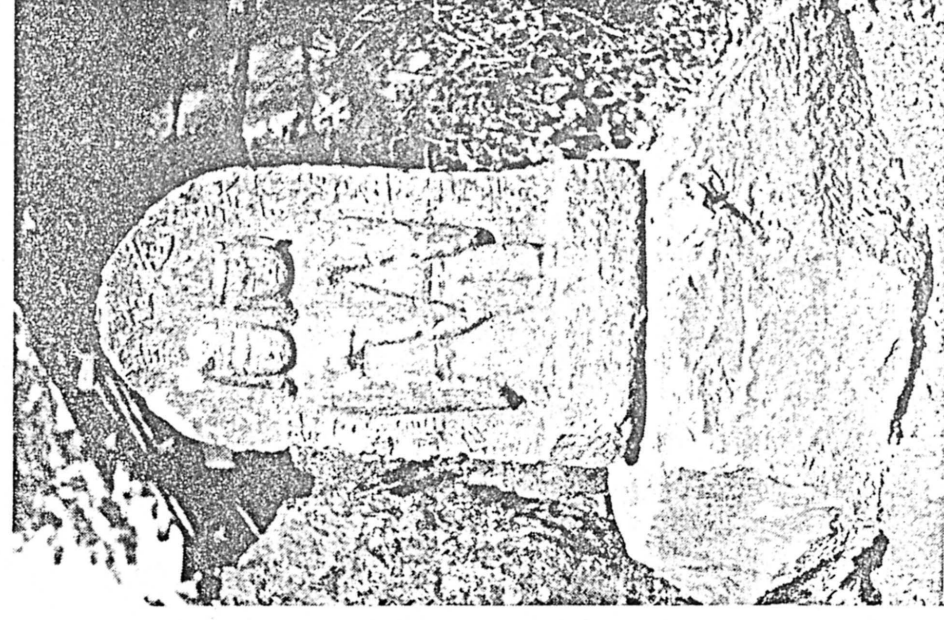
▽ (16) 失われた道祖神塔（延宝六年）
大東の辻

路傍の石仏

を大切にしましょう



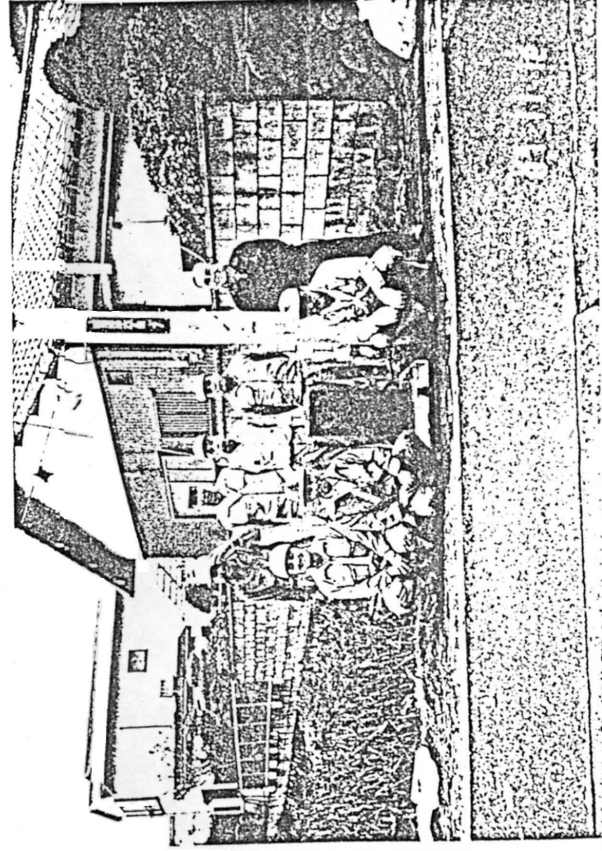
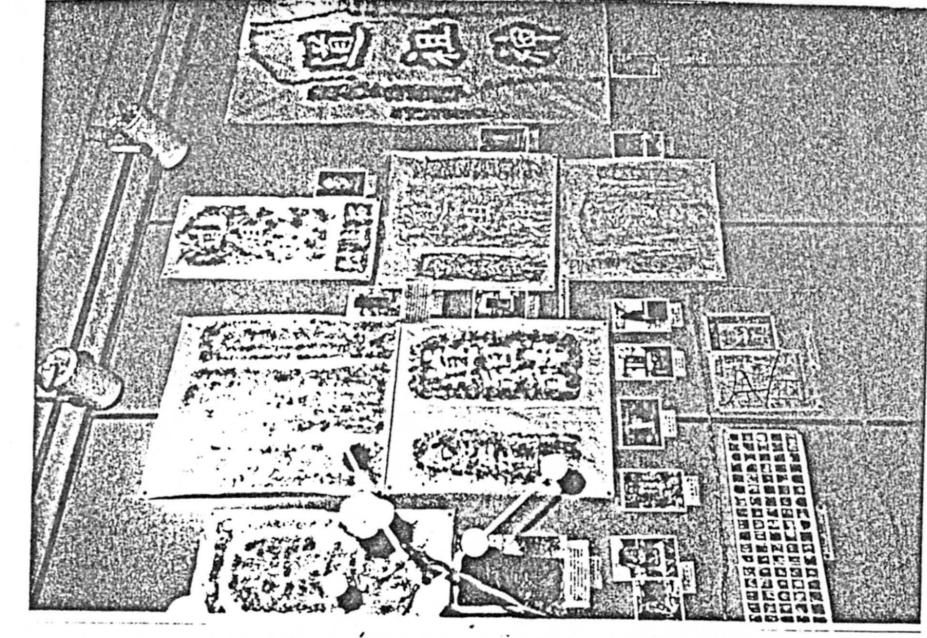
△ (18) 鵠沼新田 失われた道祖神塔（安永8年）



△ (17) 失われた道祖神塔（安永2年）
納屋の辻



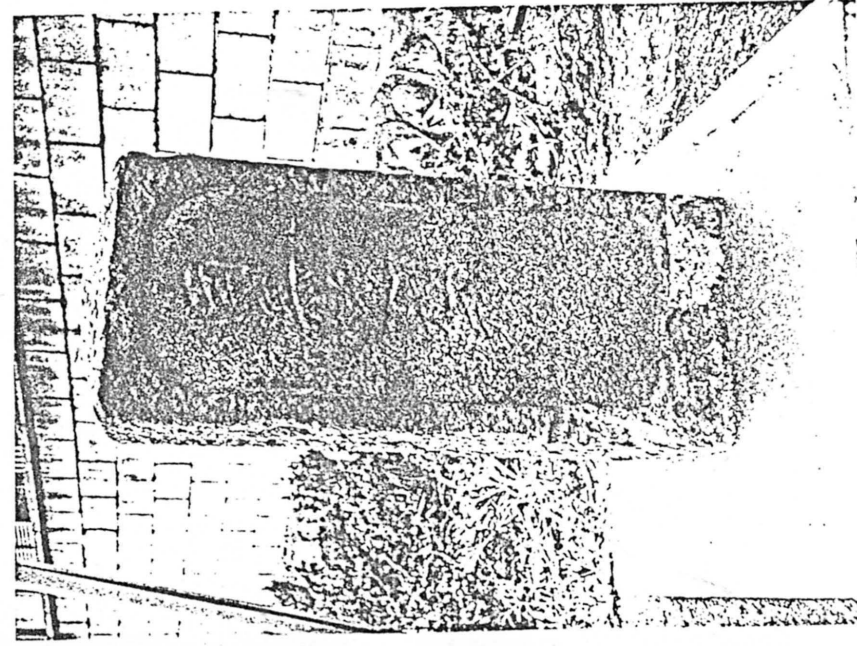
△ 会場内の道祖神塔の拓本と写真展示 △



△ 移設が完了して役員さんと市職員記念写真



△ 町内役員さんが道祖神塔の移転が始まった

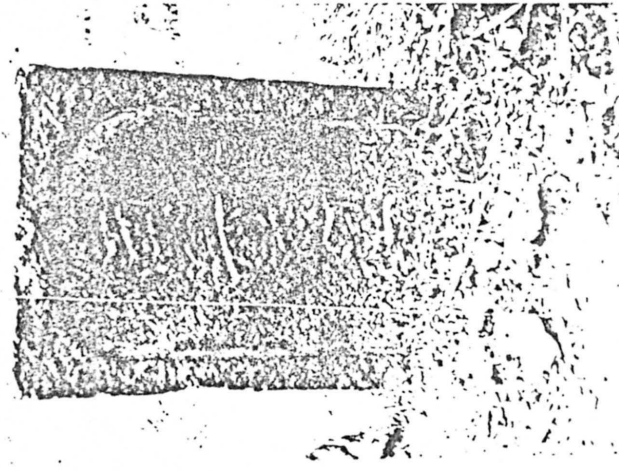


△ 移設後の道祖神塔

(1) 南無道祖神塔の碑文新発見☆

鳩沼を語る会道祖神まつり実行委員が
拓本蒐集した碑文中「願主」右脇「守護」
中央「浅場太郎左エ門」左脇、新発見を
した。道路改修時に嵩上工事が行われ
法面が道祖神塔三分一程埋没し碑文が今
日まで不明のままであった。

堀川地区自治会役員、市役所のご協力
を得て鵜沼海岸6-7-1番地 S62,11,12
町内役員さんと市役所職員にて移設され
移設のお祭りが行われた。



△ 移設前の道祖神塔

藤沢市道祖神社一覽表 昭和50年3月調

昭和5.0年3月調

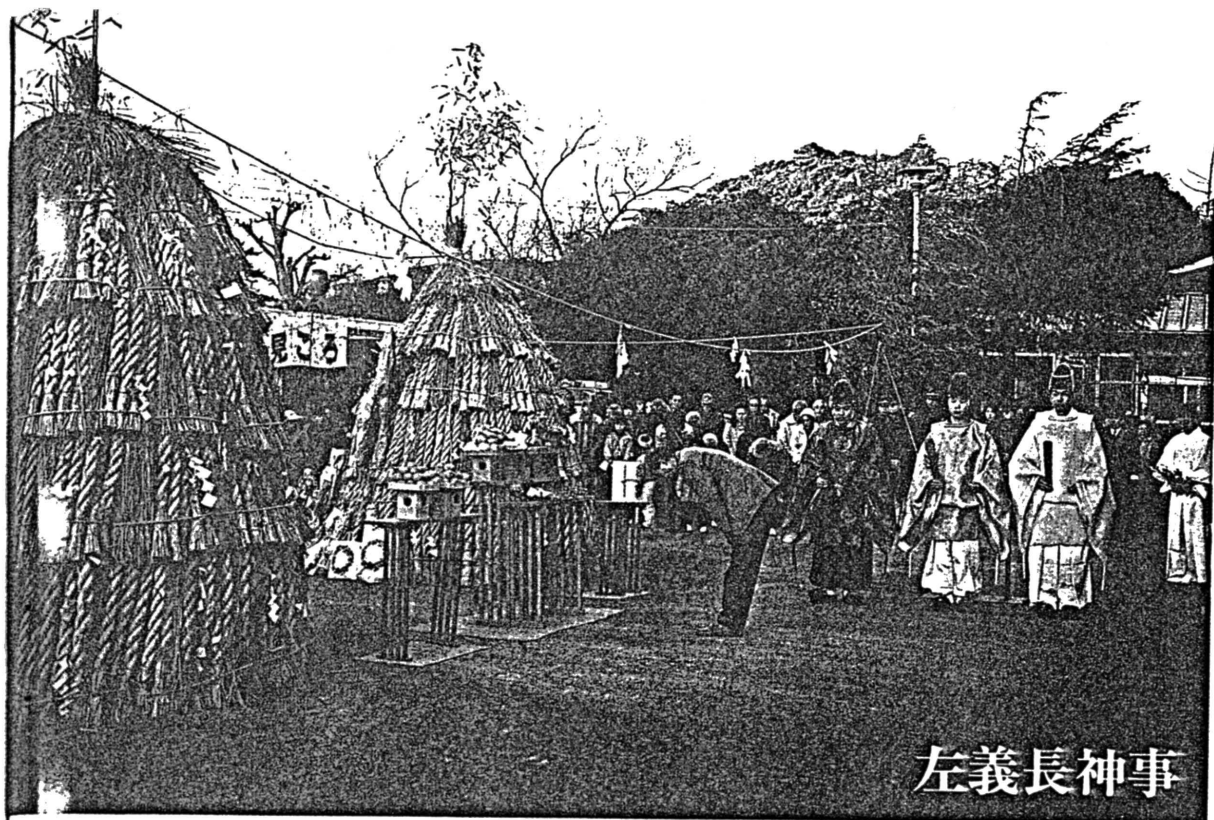
地区	片瀬	村岡				藤沢		招徠	明治		治政			六会			御所見			遠藤	合計								
		柄沢	宮前	弥勒寺	高谷	小塚	渡内		坂戸	大久保	西富	鳩沼	辻堂	羽鳥	折戸	大庭	石川	円行	下土			亀井	西保	今田	長七ツ	葛原	用田	額郎	打辰
江の島	片瀬	柄沢	宮前	弥勒寺	高谷	小塚	渡内	坂戸	大久保	西富	鳩沼	辻堂	羽鳥	折戸	大庭	石川	円行	下土	亀井	西保	今田	長七ツ	葛原	用田	額郎	打辰	宮原	遠藤	合計
宝永 1673~											○																	○	
天和 1681~																													
貞享 1684~																													
元禄 1688~											□○														○□○				○□○
宝永 1704~																													
正徳 1711~																													
享保 1716~																													
元文 1736~																					○								○
寛保 1741~																													
延享 1744~																													
寛延 1748~											□○				○									○					○
宝暦 1751~																													
明和 1764~											□○																		○
安永 1772~																													
天明 1781~																													
寛政 1789~			○																										
享和 1801~																													
文化 3001																													
文化 1804~																													
文政 1818~																													
天保 1830~	○																												
弘化 1844~																													
嘉永 1848~																													
安政 1854~																													
万延 1860~																													
文久 1861~																													
元治 1864~																													
慶応 1865~																													
年時不明																													
明治 1868~																													
年時不明																													
大正 1912~																													
年時不明																													
昭和 1926~																													
年時不明																													
○	1	1								1	8	4	6	5	3	1	3	1	2	3	1	4	5	3	1	5	4	(3)	1
□																													
□○	1									2	2	1	1	2	3	7	(6)				5	(4)		2	1	1	3	(19)	5
×○											3																		
○	1																												
◇																													
△	1																												
▽																													
計	2	3	2	1	2	2	3	2	4	3	22	5	2	9	11	10	(6)	1	4	8	6	1	5	3	10	9	7	6	14

註 形式、略表示 ○ 後背型(舟型) □ 角柱型 × 自然型 ◇ 石廟(石洞) ▽ 笠塔婆型
神像 神名略表示 • 双体神像 ⊙ 神名(文字) △ 神主(陰、陽云)

[illegible]

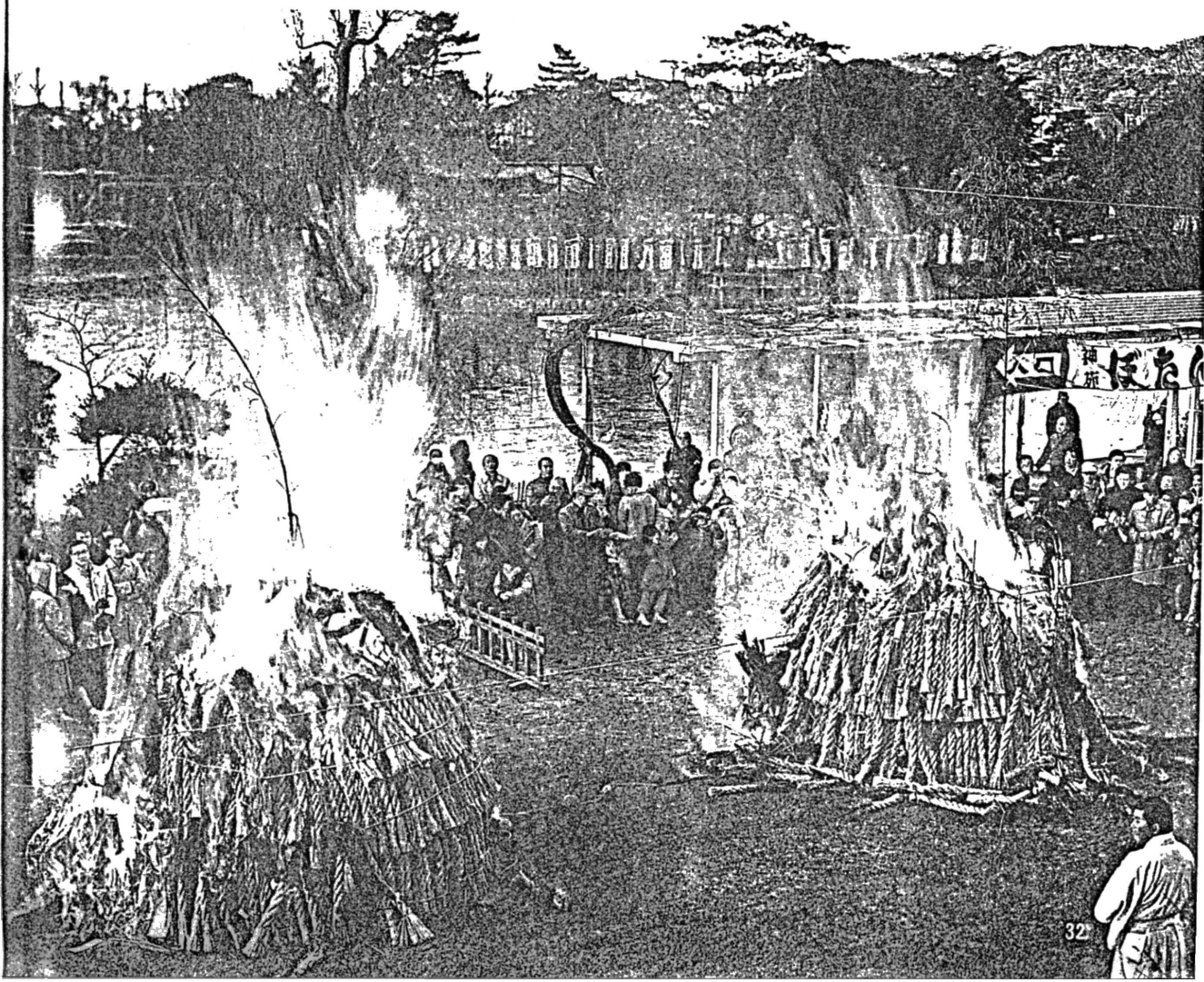
どんどん焼荒井寛方

昭和四年第一六回再興院展出品作。どんどん焼とは、左義長ともいい小正月の火祭のことをいう。円錐形や方形に組みあげた竹に、飾や縁起物をつけ、前年のお札や門松と一緒に焼く祭札であり、その火で焼いた団子や餅を食べると無病息災だといわれる。逆巻く炎の表現は、日本では中世より盛んに描かれてきて、模写を多く手がけた寛方は得意であつたろう。近代では大正一二年、御舟が描いた幻想的な「炎舞」が有名であるが、寛方の炎は大らかで明るく巨大である。寛方は民俗的表現に向っている。団子がやけるのを楽しみに待っている子供たちの顔には、仏画を長く描いてきた寛方ならではの優しい菩薩のような笑えみが浮ぶ。



鶴岡八幡、左義長神事 一月一五日
さぎちよう

左義長神事



荒井寛方　どんと焼　昭和四年



『 鵠 沼 』 40号

1988年 1月12日 発 行

鵠沼道祖神まつり 特集号

発 行 所 鵠沼公民館

電 話 33-2001

編集 鵠沼を語る会 塩沢 務

藤沢市鵠沼海岸3-12-33

電 話 36-7876